

スウィフトの蔵書

橋 沼 克 美

およそ読者が作者の思想を十分理解せんとするならば、重要な章句が作者のペンより流れ出た瞬間作者が身を置いていた境遇と立場に読者自身が立ってみることが最良の方法である。これによって読者と作者との間に立場の類似と観念の一致とが出来上がる。

——『桶物語』「緒言⁽¹⁾」

ある作家の作品を読む場合、ひとつの理想的な状況は、その作品が書かれた時点に作者の頭の中で起こっていたこと全てがわかることである。無論、これはあり得ない状況であって、現実には、作者の意図のごく一部ですら知り得ないことが多い。通常は、作者の創作の過程を説明できるようなもっともらしいコンテクストを、読者が思い思いに提供することで満足するしかないのである。

ところで、ジョナサン・スウィフトの場合、250年も前の作家にしては、作品の制作過程に関する手がかりとなる史料が、比較的よく残されている。そのような史料としては、書簡における作品への言及がまず挙げられるが、間接的な史料としては読書に関する史料がある。これには3つの種類がある。

A. 1697年から1698年にかけての読書リスト

スウィフトはミア・パークにあったウィリアム・テンブルの屋敷に、1688年から1699年まで寄宿していた。テンブル家への滞在は2度のアイルランド帰行により中断されるが、その第3期(1696年5月から1699年1月)は、初期の代表作である『桶物語』三部作を執筆した時期とされている。スウィフトは、この期間中の1697年1月7日から1698年1月7日までの1年間に読んだ書物のメモを残した。そのメモは紛失したが、スウィフトの晩年に後見人を勤めたジョン・ライアン(John Lyon)が書き写したものが残っている。この読書記録は、現在までのところ決定版であるガスケルチ=スミス(Guthkelch and Smith)編『桶物語』の中に収録されている⁽²⁾。

リストには、36点の書物のタイトルと著者名のいずれかまたは両方が記されている。2度以上読んだものにはその旨、“bis”あるいは“ter”のように、また、抜粋・摘要を作って読んだものには“abstracted”と付記されている。個々の書物の体裁については詳しく記されて

いないが、二つ折り版である場合には“fol”または“fo”と略記されており、また、複数巻のものは、その巻数が記載されている。

リストは30歳の頃のスウィフトの勉強家ぶりと彼の関心の巾の広さを示している。36点の中には、ホラティウス9巻とサン・テヴルモンの5巻 (*Oeuvres Melees*) が含まれている。1巻本の中にはチャーベリー卿エドワード・ハーバートの『ヘンリー8世伝』(1649年; 639 p.) のように二つ折り版の浩瀚なものも含まれている。ジャンルは多岐にわたっているが、歴史、旅行記、ギリシャ・ラテンの古典が多く、特にフランス語の書物が11点と3分の1近くを占めているのが目立つ。スウィフトが2度以上読んだのは、ウェルギリウス(2度)、フロルス(3度)、ルクレティウス(3度)の3点である。抜粋・摘要を作って読んだものは、スレイダン、バオロ・サルピの『トレント公会議史』(英訳1676年)、ディオドロス・シクルス、キュブリアヌスとイレナイウス、そしてトマス・ホップズ訳のトゥキディデース『ペロポネソス戦史』の5点であり、いずれも「堅い」種類の書物ばかりである。

リストに含まれている書物が、『桶物語』や以後のスウィフトの作品にどのように反映されているかという点は大変興味深いのが、残念ながら、まだまだ不明な部分が多く、そのような方向での今後の研究の進展が望まれる。因みに、ガスケルチニスが『桶物語』の注釈に用いているのは、リストにある36点中15点だが、それ以外の書物が『桶物語』の執筆に全く影響を与えなかったと断定することはできない⁽³⁾。リストにある全ての書物を調べて作品中の類似の個所に注釈を付けたとしたら、注釈過剰になってしまうと、ガスケルチニスは述べているが、スウィフトの作品の理解のためには、より詳細な注釈を施したテキストがあったほうがよいのではないか。シェイクスピアやミルトンやボープに比べれば、スウィフトは注釈過剰どころか、まだまだ注釈が少なすぎるように筆者には感じられる。

B. 1715年の蔵書目録

スウィフトは、アン女王の崩御に伴うトーリー党政権失脚の直後、1714年8月末にイングランドを後にしアイルランドを永住の地と定める。この後の数年間は目立った著作活動もせず、意気消沈の日々を送ることになるが、後世のスウィフト研究者にとってはありがたいことに、1715年8月19日の日付入りで蔵書の目録を書き残してくれた。この自筆の目録は、1927年に当時その所有者であったT. P. ルファニユによって公表された⁽⁴⁾。目録に含まれている書物の点数は380余、冊数にして約600である。このうち、スウィフト自身の書き込みのあるものにはアステリスク(*)を付してルファニユは区別しており、その数は51点である。これらの書物はスウィフトが実際に読んだことを示すので、研究者にとってはとりわけ興味深い。

目録は書物のサイズと書かれている言語の2つの規準にしたがって、以下のように11のカテゴリーに分類されている。()内の数字は筆者が加えたもので点数を示す。

Libri classici et philologici in folio (71)

Libri theologici in folio (10)

- French and English Books in folios miscellany (24)
- English books in folio (10)
- Libri classici &c. in quarto (22)
- Libri in quarto (37)
- Libri classici in octavo et duodecimo (65)
- Libri in octavo et duodecimo (38)
- English and French books in octavo and duodecimo (83)
- Engl. and Fr. books in octavo (36)
- Engl. and French divinity in octavo &c. (10)

ギリシャ・ラテンの古典とフランス語の書物が多いのは、史料 A と共通する特徴である。個々の書物の記述のしかたは史料 A よりも正確である。タイトルと著者名のいずれかまたは両方を記している点と、複数巻のものに巻数を付している点は史料 A と同じだが、多くのものにはさらに、出版地・出版社・刊行年を記している。この目録の最大の特徴は、かなりの数のものに購入時の価格を記していることである。たとえば、1578 年版プラトン全集は 4 ポンド 10 シリング、グロノウィウスとグラエウィウス編の 3 種類のギリシャ・ラテンの古典集成は全 29 巻で 40 ポンド（スウィフトの書斎の訪問客たちの目を最も引いたが、ボリングブルックから寄贈されたものである⁽⁶⁾）、クラレンドン卿の『英国内乱史』全 3 巻（1707 年）は 3 ポンド、ホップズの『リヴァイアサン』（1651 年）は 10 シリングである。スウィフトは会計簿も残しており（最近公刊された⁽⁶⁾）、出費の記録に関しては几帳面であった。

C. 1746 年の蔵書売却目録

3 番目の史料は、スウィフトの死の翌年 1746 年に彼の蔵書の売却目録 (sale catalogue) として出版業者のジョージ・フォークナーによって出版されたものである。このカタログは現在 4 部しか残存していないらしいが⁽⁷⁾、1932 年にそのうちの 1 部の所有者であったハロルド・ウィリアムズが『スウィフトの蔵書』の巻末に翻刻している⁽⁸⁾。

カタログの中身について述べる前に、その成立事情について触れておきたい。このカタログの元になったのは、前記ライアンが 1742 年に作成したリスト（史料 A とは別物）である。この年の夏、74 歳のスウィフトは自己の身柄及び財産の管理能力無しとの法的宣告を下され、数名の後見人が付けられた。ライアンは聖パトリック教会の受禄聖職者 (prebendary) であったが、スウィフトの後見人として財産を管理するにあたり、所有物の目録を作っており、蔵書目録はその一部分であった。当時、個人の財産内容の明細を目録に記すことは、本人の死後に行われるのが通常であったが、スウィフトの場合には特殊な事情があったため、少し早目に行われたのである。ライアン同様聖パトリック教会の受禄聖職者であったフランシス・ウィルソンという人物がいた。ウィルソンは数年来スウィフトの家に寄宿していたのだが、度々金を借りて返さなかったり、書物などの物品をくすねたりしたばかりでなく、あるとき、スウィフトの毫碌に乗じて無理やりに酒を飲ませて酔わせ、体のあちこちに傷を作らせた（ウィルソン自身が殴打した疑いもあるらしい）卑劣な男であった⁽⁹⁾。特に最後の事

件は、前述の心身喪失 (*non compos mentis*) との法的宣告の、そして、後見人による身辺保護の直接のきっかけとなった。

ライアンが作成した蔵書目録は、4年後の競売用カタログの原型となった。カタログに掲載されている書物には通し番号が付けられており、最後は657である。この数字は点数ではなく冊数を示し、実際の点数は約500である。この数字は、1715年の時点と比較すると、点数で120ほど増えているが、冊数では50余りしか増えていない。また、この30年間にスウィフトが蔵書に新たに追加した書物は約175冊、紛失もしくは譲渡したものは約150冊である⁽¹⁰⁾。書物の分類の仕方は、ウィリアムズ曰く「素朴で非科学的⁽¹¹⁾」、即ち、ただサイズによってのみ12の区分に分けられている。アルファベット順、ジャンル、言語といった点は考慮されておらず、我々スウィフト研究者にとっては使いにくいのが欠点である⁽¹²⁾。

ジャンルについてみると、古典・歴史・旅行記・フランス語文献がやはり多い。こうした方面へのスウィフトの興味は若い頃から変わらなかったようである。アステリスキのついてあるもの、すなわち、スウィフト自身による書き込みのあるものは約70点で、史料Bより20余り増えている。

以上、3つの目録について概要を紹介したが、これでスウィフトの読書の全容が窺えるわけではないのは勿論である。スウィフトは読書家ではあったが、書物の収集家ではなかった。彼が生涯所蔵した書物の総点数は約680だが、この数字は蔵書家というには少なすぎる。たとえば、スウィフトの友人であり、文人・外交官であったマシュー・プリアの蔵書数は1900冊、スウィフトの文学的後継者ともいべきロレンス・スターンは2500であった⁽¹³⁾。このふたりがスウィフトよりも格別に裕福だったわけではない。スウィフトは本に無駄な金を使いたくなかったのである。1711年、ロンドンの博識な外科医チャールズ・バーナードの死後に開かれた蔵書の競売に、スウィフトは数度出かけているが、その時の感想をステラに手紙で伝えている。「……それからチャールズ・バーナードのオークションに行ったが、いい物は恐ろしく高いので手が届かなかった。それで1ポンド7シリングをどうでもいいような本に投資して帰って来た。もう二度と行かないつもりだ⁽¹⁴⁾。」しかしこの手紙の2日後、スウィフトは再びオークションに出かけて3ポンド3シリング使い、さらにその2日後にも出かけて12シリングほどの本を買っている。読書家スウィフトと儉約家スウィフトの葛藤が窺えて面白いエピソードである⁽¹⁵⁾。

スウィフトが自分の蔵書以外にどのような本を読んだかという点についてはあまりわかっていない。ダブリンのトリニティ・コレッジの学生時代は、「学問研究は怠けて歴史と詩を読んだ⁽¹⁶⁾」と、後年に書いた自伝的覚書の中でいっている。テンプルの秘書時代のスウィフトの読書量は相当なものだったと考えられる。『桶物語』にみられる博引旁証ぶりがその何よりの証拠である。この作品の中で言及されているが、上記3つの目録のいずれにも載っていない書物も少なくない。これらの書物の多くは、おそらく、テンプルの書庫から借りたものだろうと思われるが、残念ながら、テンプルの蔵書について知り得るような史料は、これまでのところ明らかにされていない。聖パトリック教会主席司祭としてのスウィフトは、

教会に隣接するマーシュ図書館を利用することができた。この図書館はヨーロッパでも最も早い時期にできた公共図書館で、現在でもスウィフトの蔵書の一部が保管されている。

以上、スウィフトの読書歴と読書傾向を知る手がかりとしての3つの史料について簡単に紹介した。作家としてのスウィフトを研究する者にとってより興味深いのは、彼が所蔵していた個々の書物が、特定の作品（の特定の箇所）にどのように用いられたのか、その可能性と意義を綿密な比較考証によって考察することである。そのような作業は、現在リアルとフィンケンらの主導の下に進められている⁽¹⁷⁾。彼らによれば、スウィフトの蔵書のうちで残存することが知られているものは約90点である。一次史料として特に貴重なのはスウィフト直筆の書き込みであるが、そのいくつかはデイヴィス編スウィフト全集などに収録されており手軽に見ることができる⁽¹⁸⁾。とはいえ、スウィフトの書き込みは多くの場合その時々感想を簡潔な言葉で記しているのに留まっており、『ガリヴァー旅行記』や『桶物語』のような主要な作品の創作の秘密を知る手がかりとなるような発見は、今までのところはされていないようである。しかしながら、スウィフトの蔵書に関する史料が、作品の注解や解釈に役立つ場合があることは否定できない。リアルとフィンケンは、蔵書目録の効用として、出典の決定・（言及されている人物や事項に対する）作者の態度の判断基準など8つの項目を挙げている⁽¹⁹⁾。

この方法が今後のスウィフト研究にどのような影響を与えることになるのか、大変興味深く思われる。ひとつの可能性として、既存のものを凌ぐような注釈版『ガリヴァー旅行記』の完成ということを挙げたい。現在最も注釈が行き届いているのはポール・ターナー編のものであるが⁽²⁰⁾、これとて物足りないと感じているスウィフト研究者は少なくないであろう。少なくともガスケルチ=スミス版『桶物語』と同等の水準の『ガリヴァー旅行記』の登場が待ち望まれる。

筆者はこれまで、スウィフトにおけるホップズの影響と医学の影響という問題に関心をもってきた⁽²¹⁾。こうした関心が生じたのは、ひとつにはテキストそのものからであるが、それと同時に蔵書目録を重視したからでもある。スウィフトのさほど多くない蔵書の中で、ホップズと医学関係書は、従来のスウィフト研究において注目されることがなかった分だけ余計に目だつのである。スウィフトが所蔵していたホップズの著作は、『市民論』、『哲学著作集』、書き込み入りの英語版及びもう1冊の『リヴァイアサン』の4点で、近代の思想家の著作の中では最も多い。スウィフトはまた、若い頃にホップズ訳のトゥキディデースを読んで覚書を作ったことがある。このことは、たとえばジョン・ロックの著作が『人間悟性論』ではなくて、経済関係のものが1冊しか見当たらないのに比べ、意外に思われるかも知れないが、スウィフトの思想を理解する上で何らかのヒントになるのではないかと。また、医学書については、ヒポクラテス、ガレノス、ケルススなどの古典医学を主として10点ほどが含まれているが、博物学・数学・化学・物理学など当時の「科学」に関する書物が皆無であるのに対し、注目すべき傾向である。古典としての医学書を読むことは、ルネサンス期の人文主義者の嗜みであったので、その意味でスウィフトは前時代からの伝統にしたがっていたのではあるが、自らメニエル病の持病をもち、各種の医療施設の運営に係わり、精神病院の設立を遺言に託

した人間スウィフトの一面を示す傍証といえないこともないのである。そして何よりも、風刺という文学ジャンルが医のことはと深い関係にあることを、テキストとは違う面から、蔵書が示しているように思われるのである。

注

1. 深町弘三訳『桶物語・書物戦争』（岩波書店、1988年）、p. 28. A. C. Guthkelch and D. Nichol Smith, eds., *A Tale of a Tub to which is added The Battle of the Books and The Mechanical Operation of the Spirit*. 2nd ed. (Oxford: Clarendon Press, 1958; 1973), p. 44. 原文は次のとおりである。“Whatever Reader desires to have a thorow Comprehension of an Author’s Thoughts, cannot take a better Method, than by putting himself into the Circumstances and Postures of Life, that the Writer was in, upon every important Passage as it flow’d from his Pen; For this will introduce a Parity and strict Correspondence of Idea’s between the Reader and the Author.”
2. *Tale*, pp. lvi-lvii.
3. そもそもリストに載っている書物の中には、著者名・正確なタイトル・発行年が不明のものがある。これらの書物の同定を試みた数少ない例としては、Arthur Sherbo, “Swift and Travel Literature,” *MLS*, 9 (1979), 114-5; Hermann J. Real, ed., *Jonathan Swift: The Battle of the Books* (Berlin: de Gruyter, 1978), pp. 129-32 がある。
4. T. P. LeFanu, “Catalogue of Dean Swift’s Library in 1715, with an Inventory of His Personal Property in 1742,” *Proceedings of the Royal Irish Academy*, Section C (1927), 263-75.
5. Harold Williams, ed., *The Correspondence of Jonathan Swift*, 5 vols. (Oxford: Oxford University Press, 1963-65), III, p. 330.
6. Paul V. and Dorothy Jay Thompson, eds., *The Account Book of Jonathan Swift* (Newark: University of Delaware Press, 1984).
7. Hermann J. Real and Heinz J. Vienken, “*Ex Libris* J. S.: Annotating Swift,” in Real and Vienken, eds., *The Proceedings of the First Münster Symposium on Jonathan Swift* (München: Wilhelm Fink, 1985), p. 308.
8. Harold Williams, *Dean Swift’s Library* (Cambridge: Cambridge University Press, 1932). 復刻版が、Folcroft社(1969)とNorwood社(1974)から出ている。
9. *Swift’s Library*, pp. 16-18.
10. *Ibid.*, p. 21.
11. *Ibid.*, p. 15.
12. この欠点を補い、アルファベット順にタイトルを並べた新しい蔵書目録が出版されたらしいが、筆者は未見である。William LeFanu, *A Catalogue of Books belonging to Dr Jonathan Swift, Dean of St Patrick’s, Dublin, Aug. 19. 1715: A Facsimile of Swift’s Autograph with an Introduction and Alphabetic Catalogue* (Cambridge: 1988).
13. Monroe K. Spears, “The Meaning of Matthew Prior’s *ALMA*,” *ELH*, 13 (1946), 273 n. 17; *A Facsimile Reproduction of a Unique Catalogue of Laurence Sterne’s*

- Library* (London and New York : 1930 ; rpt. AMS, 1973).
14. *Journal to Stella* in Herbert Davis et al., eds., *The Prose Writings of Jonathan Swift*, 16 vols. (Oxford : Clarendon Press, 1939-74), XV, pp. 239-40.
 15. Cf. *Correspondence*, I, p. 282 ; II, p. 31.
 16. *Prose Writings*, V, p. 192.
 17. 前記注 7 の他, “ ‘A Pretty Mixture’ : Books from Swift’s Library at Abbotsford House,” *Bulletin of the John Rylands University Library of Manchester*, 67 (1984), 522-43 ; “The Holdings of Ehrenpreis Center (I),” *Swift Studies*, 2(1987), 2-3 ; “Gulliver and Mandeville,” *NQ*, New Series, 30 (1983), 512 ; “Lemuel Gulliver’s Ships Once More,” *ibid.*, 518-9 など多数ある。
 18. *Prose Writings*, V, pp. 241-320. 収録されているのは 12 点で, ヘロドトスとボダン以外は全て英語で書かれた書物である。
 19. “*Ex Libris J. S.*,” pp. 309-18.
 20. Paul Turner, ed., *Gulliver’s Travels* (Oxford : Oxford University Press, 1971).
 21. 拙論「スウィフトの初期風刺作品にみられるホッブズ的要素」, 『試論』第 26 集 (1987 年), 19-41 ; “Thomas Hobbes and the Satire on Enthusiasm in Swift’s *A Tale of a Tub*,” 『福岡大学総合研究所報』第 107 号 (1988), 11-25 ; “Thomas Hobbes and Swift’s *A Tale of a Tub* : An Essay on the Problem of Criticism,” 同上, 第 108 号 (1988), 15-27 ; 「スウィフトの医学的風刺」『一橋論叢』第 105 卷 (1991), 326-40.